

## 伊豆南部特殊アクセントの実態と変化の様相

著者名(日)	木川 行央
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	12
ページ	73-91
発行年	2006-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00000424/">http://id.nii.ac.jp/1092/00000424/</a>

The Present Condition of Local Accent in the Southern Izu Peninsula and Aspects of Change

## 伊豆南部特殊アクセントの実態と変化の様相

木川行央

The Present Condition of the Local Accent in the Southern Izu Peninsula  
and Aspects of Change

Yukio Kigawa

伊豆半島南西部のアクセントは東京式アクセントとされるが、隣接する地域とその様相を異にする。この伊豆南部特殊アクセントの地域については先行研究によって報告がなされているが、現在の状態がどうであるか、また若年層がどのような状況であるのかを確認するため、静岡県賀茂郡松崎町池代において面接調査を実施した。その結果高年層には先行研究の指摘のような揺れが現在でも見られ、中高と尾高、尾高と平板、そして平板は中高・尾高との間で揺れが見られることを確認した。また、アクセントについて男女差があるのではないかという指摘があるが、今回の調査でもその可能性が認められた。若年層は共通語化が進んでおり、また高年層で見られる揺れも少なくなっている。しかし、いくつかの特徴は、弱まっているが依然残っている点があることも明らかになった。

\*伊豆南部特殊アクセント \*アクセント変化 \*アクセントの揺れ \*年代差

### 1. はじめに

伊豆半島南西部方言のアクセントは東京式アクセントではあるが、隣接地域とはかなり様相が異なるという指摘が、馬瀬良雄（1961）、前川秀雄（1970）以来なされており、その実態の詳細については、中條修（1976、1983、1996）、山口幸洋（1987、1996、1998、2001、2002）、亀田裕見（1994）などで報告・分析されている。しかし、その特徴的なアクセント（本稿では中條にならうこのアクセントを伊豆南部特殊アクセントと呼ぶ）も「時代の推移とともにその特色を少しずつ薄めながらも、昭和中期生まれ（1950年代）の中年層までは受け継がれている」が、「それ以降のテレビの普及とともに成長し

## 言語科学研究第12号（2006年）

た『テレビっ子』と呼ばれる世代」においては「東京語とほとんど変わらないアクセントになっている」（中條1996:p.1013）。

このような、伊豆南部特殊アクセントの地域である松崎町池代のアクセントについて、木川行央（2005）では談話資料からその実態を見た。その結果を受け、現在の池代におけるアクセントの状況および年代による差を含め確認するため、2005年9月同じ松崎町池代においてアクセント調査を実施した。本稿では、その結果の概観を報告したい。

## 2. 伊豆南部特殊アクセントの特徴

伊豆南部特殊アクセントの特殊性は、ある語が様々な型で発音されるということ、しかし無型アクセントのように語により現れる型が全く定まっていないうわけではないことにある。具体的にどのような状況にあると報告されているかを、中條（1996）により確認しておこう。同論文の記述をまとめると以下のようなになる。

- 1 1拍名詞は、「男性には東京語アクセントと同様、1・2類と3類の間に平板型／頭高型の対立を認めてよい」（p.1001）が、「女性の場合は、1・2類が頭高型に実現される傾向がきわめて強く、一見、平板型を欠く状態にあるとするのが妥当と考える。なお、3類の名詞は男性と同様、平板に発音されることはほとんどない」（p.1002）。
- 2 2拍名詞は、2・3類、4・5類は男女とも、東京と同じく前者は尾高型、後者は頭高型で、「比較的安定している」（p.1004）。1類は、男性は東京と同じく平板型（ただし高低差は小さくなることがある）になり時に尾高型になるが、女性は尾高型になる。
- 3 東京語で頭高型になる「貝、金、塔」など「第2拍に /i/、/N/、/R/ が立つ語は、松崎では男女を問わず」尾高型に発音される（p.1004）。
- 4 3拍名詞は、男女とも平板型、尾高型、頭高型、中高型の4種を認めて良いが、平板型と尾高型は「型の変化を起こしつつあり、揺れや変化が観察される」（p.1008）。この揺れは女性に多く見られる。また、中高型に発音される語は東京語より多く、「東京語アクセントの頭高型に対応する例が目立ち、その多くは東京語より古い相を示している」

The Present Condition of Local Accent in the Southern Izu Peninsula and Aspects of Change

(p.1007)。また、中高の語に付属語が伴う「アクセント節では山を後ろに押し出す傾向が見られ、尾高下型への揺れや変化が観察される」(p.1008)。

この他に、山口(1998)等で「節末下降」の現象が報告されているが、本稿ではこれについてはふれない。

### 3. 調査について

今回の調査は、2006年9月静岡県賀茂郡松崎町池代において実施した。話者は表1の16名である。

今回の調査では、40・50歳代、20歳代、また30歳代の女性の話者を対象とすることができなかった。また、F33とF90bについては時間の都合上、すべての調査を実施することはできなかった。なお、M41と30代男性は外住歴が長い。これは現在の当地点においてはよく見られることであり、この状況は今後も変わることはないであろう。したがって、これからのこの地域の言葉は、これら

表1 話者一覧

話者記号	性別	生年	外住歴
F24	女性	1924	なし
M24	男性	1924	なし
F27	女性	1927	なし
M28	男性	1928	なし
F28	女性	1928	なし
F31	女性	1931	なし
F33	女性	1933	なし
M41	男性	1941	0-4外地 4-15池代 15-32神奈川県・東京都など 33-池代
M72a	男性	1972	0-18池代 18-24岐阜県 24-池代
M72b	男性	1972	0-18池代 18-33沼津
M74	男性	1974	0-7富士 7-15池代 15-18葦山 19-23神奈川県 23-池代
M90	男性	1990	なし
F90a	女性	1990	なし
F90b	女性	1990	なし
F92	女性	1992	0-2神奈川県 2-池代
M93	男性	1993	なし

言語科学研究第12号（2006年）

外住歴の長い人、および他地域から入ってきた人達の影響をより強くうけていくことが考えられる。

さて、今回の調査では、1拍～3拍名詞については、以下の発音を求めた。

- (1) 絵や謎々による単語単独の発音。
- (2) (1) によって発音された語を用い話者が作成した文の発音。
- (3) 対象となる単語単独の読み上げ。
- (4) 対象となる語に助詞「が」の後接した句の読み上げ。
- (5) 助詞が後接する語と述語からなる文、各語につき2文（東京語のアクセントにおいて頭高となる語が後接する文と、低く始まる語が後接する文を各1文ずつ）の読み上げ。
- (6) 助詞が後接する語に修飾語を付けた比較的長い文、各語につき1文の読み上げ。
- (7) 助詞の後接しない語（無助詞）と述語からなる文、各語につき2文（上記（5）と同様）の読み上げ。

以上、各語9回の発音（助詞の後接する形が5回、助詞の後接しない形が4回）を求めたわけであるが、上記の（1）～（7）全てを求めなかった語もある。また、（1）で、「ネ（根）ではなくネッコを日常的に用いる」、「スズリ（硯）ではなくスズリイシが自然である」等の理由で、答えが求めにくい場合、強いて発音を求めなかった。したがって、以下の集計で語あるいは話者によって発音回数が異なる場合がある。

4拍名詞については、単語単独と助詞付きの単語と述語からなる文の読み上げによる発音を求めた。

本稿では、2拍名詞と3拍名詞の結果を見ていくことにする。これ以外の拍の結果や、上記（1）～（7）の環境による異なりについての分析は稿を改めたい。

#### 4.2 拍名詞

2拍名詞については、表2の語を調査した。

まず、1類の結果は表3のようであった（2拍名詞については、助詞が後接した形のみ結果を示し、助詞が後接しない形は必要に応じ言及する。また、

## The Present Condition of Local Accent in the Southern Izu Peninsula and Aspects of Change

表2 2拍名詞調査語彙

1類	牛、飴、釘、梅、鼻
2類	橋、紙、胸、雪、蟬（雪は謎々式調査は省略）
3類	花、耳、足
4類	海、船、箸、肩
5類	鍋、猿、蛇、雨、蜘蛛、汗

基本的にそれぞれの調査文は1回ずつの発音を求めたが、2回発音が聞かれる場合もあり、その発音が異なっている場合はそれぞれの発音を0.5回とした。

助詞が後接しない形においては、70歳代以上でわずかながら頭高で発音する場合があるが、世代を問わずほとんど全ての発音が2拍目から高くなる。これに対して、助詞が後接する場合は、やや様相が異なり、60歳代以上（以下高年層と呼ぶ）の男女についてみると、尾高の発音が1類の語の全発音の17%～31%の割合で現れる。特にF24は7割弱を尾高で発音している。ただし、個人による差が大きく、全く現れない話者もある。この差を中條（1996）の指摘のように男女差とできるかが問題となる。この人数で男女差を検定するには問題があるが、男性話者の全発音と女性話者の全発音によってカイ自乗検定を行うと（発音回数の少ないF33を除く。以下の検定においては同様の処置をする）、5%水準で有意に女性に尾高が多い。ただし、F24において殊に尾高の出現率が高く、この話者を除くと男女による差があるとは言えない。男女それぞれの人数が多くないこともあり、確定的なことは言えないが、他の要因によると考えるべきであろう。すなわち、高年層では平板と尾高の間で若干の揺れがあることは確認できるが、女性は尾高型になるとは言い切れないという結果になったというわけである。中條（1996）の結果と異なる結果となった原因としては、話者の年齢差等が考えられるが、確認はできない。30歳代以下（以下若年層と呼ぶ）においては、ほぼ全て、東京と同じ平板型で発音される。

次に2類は、助詞が後接しない場合、年齢による差はなく、下がり目のない発音がなされる。助詞が後接した形（表4）の場合には、若年層ではほぼ全ての発音が尾高であった。高年層も基本的には、尾高型で発音される。しかし少ない場合で高年層の12%（「雪」）、多い場合には46%（「蟬」）の割合で平板に発音されている。「蟬」における平板の出現率の高さは、他の語に比しても高く、

言語科学研究第12号（2006年）

表3 2拍名詞1類（助詞が後接する場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
牛	○●▲	1	5	4	3	4	3	3	5	5	5	5	5	5	4	5	5	67
	○●△	4	0	1	2	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
鮎	○●▲	2	5	5	4	5	3.5	3	4	5	5	5	5	5	4	5	5	70.5
	○●△	3	0	0	1	0	1.5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6.5
釘	○●▲	2	5	5	3	5	2.5	2	4	5	5	5	5	5	1	2	5	61.5
	○●△	3	0	0	2	0	2.5	1	1	0	0	0	0	0	3	3	0	15.5
梅	○●▲	2	5	5	4	4	4	2	2	5	5	5	5	5	4	4.5	5	66.5
	○●△	3	0	0	1	1	1	1	3	0	0	0	0	0	0	0.5	0	10.5
鼻	○●▲	1	5	5	4	3	1	3	4	5	5	5	5	5	4	5	5	65
	○●△	4	0	0	1	2	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	12
計	○●▲	8	25	24	18	21	14	13	19	25	25	25	25	25	17	21.5	25	330.5
	○●△	32	100	96	72	84	56	86.7	76	100	100	100	100	100	89.5	86	100	85.8
	○●▲	17	0	1	7	4	11	2	6	0	0	0	0	0	3	3.5	0	54.5
	●○△	68	0	4	28	16	44	13.3	24	0	0	0	0	0	15.8	14	0.0	14.2

各語の欄の数字および計の欄の上段の数字は発音回数、計の下段は百分率。以下同様。

表4 2拍名詞2類（助詞が後接する場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
橋	○●△	5	4	2	5	3	4	2	4.5	5	5	5	4	3	4	4.5	5	65
	○●▲	0	1	3	0	2	1	1	0.5	0	0	0	1	1	0	0.5	0	11
	●○△	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
紙	○●△	5	5	4	5	4	3	1	4	5	5	5	5	5	4	5	5	70
	○●▲	0	0	1	0	1	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	7
胸	○●△	5	4	4	5	4	4	1	5	5	5	5	5	5	4	5	5	71
	○●▲	0	1	1	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
雪	○●△	4	4	3	3	4	2	3	3.5	4	4	4	4	2	4	4	4	56.5
	○●▲	0	0	1	0	0	2	0	0.5	0	0	0	0	2	0	0	0	5.5
蟬	○●△	1	4	3.5	3	2	1	2	4	5	5	5	5	4	4	5	5	58.5
	○●▲	4	1	1.5	2	3	4	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	18.5
計	○●△	20	21	16.5	21	17	14	9	21	24	24	24	23	19	20	23.5	24	321
	○●▲	83.3	87.5	68.8	91.3	70.8	58.3	60.0	87.5	100	100	100	95.8	79.2	100	97.9	100	86.8
	○●▲	4	3	7.5	2	7	10	6	3	0	0	0	1	4	0	0.5	0	48
	●○△	16.7	12.5	31.3	8.7	29.2	41.7	40	12.5	0	0	0	4.2	16.7	0	2.1	0	13.0
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4.2	0	0	0	0.3

表5 2拍名詞3類（助詞が後接する場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
花	○●△	5	5	3.5	4	4	3	0	5	5	4	5	5	3	4	3	5	63.5
	○●▲	0	0	1.5	1	1	2	3	0	0	1	0	0	2	0	2	0	13.5
耳	○●△	5	5	4	5	4	4	2	5	4	4	4	5	5	4	5	5	70
	○●▲	0	0	1	0	1	1	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	7
足	○●△	5	5	5	5	4	4	3	5	5	5	5	5	4	4	5	5	74
	○●▲	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3
計	○●△	15	15	12.5	14	12	11	5	15	14	13	14	15	12	12	13	15	207.5
	○●▲	100	100	83.3	93.3	85.7	73.3	55.6	100	93.3	86.7	93.3	100	80	100	86.7	100	89.8
	○●▲	0	0	2.5	1	3	4	4	0	1	2	1	0	3	0	2	0	23.5
	●○△	0	0	16.7	6.7	21.4	26.7	44.4	0	6.7	13.3	6.7	0	20	0	13.3	0	10.2

## The Present Condition of Local Accent in the Southern Izu Peninsula and Aspects of Change

語的な問題であることも考えられる。さて、この場合男女差があるかという点であるが、これについては3類とあわせて考える。

東京語で2類と同様尾高で発音される3類も、助詞が後接しない形ではすべてが下がり目のない発音であった。助詞が後接した形(表5)では、若年層においてはほぼ尾高となる。これに対し高年層では、多い話者の場合4割以上を平板で発音している(ただしこの話者は、発音回数の少ないF33であるが)が、少ない話者の場合には全く平板で発音しない。この場合男女差がみられるのかという点であるが、2類とあわせてカイ自乗検定により検討してみると、高年層の男女において差が認められ、女性が平板で発音する割合は5%水準で有意に高い。これは2類で問題となる「蟬」を除いて集計しても同様である(この集計でも発音の回数の少ないF33を除いて検定を行っているが、F33は他の女性話者に比べても、平板で発音する割合が高い)。

4類と5類については、聞こえに関する問題がある。それは、この類の語に助詞が後接する場合、1拍目から高く2拍目の次で下がるように聞こえる場合が世代にかかわらず頻繁にあるということである。また、助詞の後接しない場合には、1拍目が高く2拍目の途中で下がるように聞こえる場合がある。この現象も、盛んとはいえないが高年層から若年層にまで聞かれる。これらは、いわゆるおそ下がり現象の現れと考えることができ、この地点において特に特徴的であるわけではないであろう(この現象の出現頻度における地域差も今後確認すべき問題である)。ただ当地点で問題となるのは、助詞が後接する場合、尾高で発音される場合もあり、判断が困難な場合があるからである。実際、話者によってはこの発音とともに現れる発音が、尾高のみの場合もある。そのため、前に高い拍で終わる修飾語が来る場合などは、おそ下がりなのか、尾高で1拍目の低が前の高い拍の影響で高になったのかの判断が難しい(なお、今回の調査では「海」「帯」「肩」「猿」「蛇」に、東京語で最終拍が高となる修飾語が前接する調査文が一文ずつあるが、今回の資料では区別していない)。そこで、表では1拍目から高い場合を頭高、尾高とは区別して集計した。ただし、最後の拍が高である修飾語が前接する場合を除き、その多くは頭高のおそ下がりと考えべきであろう。

さて、これらの類の語に助詞が後接しない場合、上記2拍目の途中で下降す



言語科学研究第12号（2006年）

表6 2拍名詞4類（助詞が後接する場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
海	●○△	1	3	2	1	0.5	0	0	0	1	2	5	4.5	4	2	1	5	32
	●●△	3	2	3	4	4.5	4	2	2	4	3	0	0.5	1	2	4	0	39
	○●△	1	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	○●▲	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
船	●○△	2	1	3	0	0.5	0	2	0	3	0	5	5	5	2.5	4	4.5	37.5
	●●△	2	4	2	5	4.5	3	1	3	2	5	0	0	0	1.5	1	0.5	34.5
	○●△	1	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	○●▲	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
審	●○△	0	3	2	0	0	0	0	0	1	0	5	2	2	2	3.5	1	21.5
	●●△	3	2	3	5	5	2	2	0	3	5	0	2	1	2	0.5	4	39.5
	○●△	2	0	0	0	0	3	1	5	1	0	0	1	2	0	0	0	15
	○●▲	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
肩	●○△	1	2	4	1	1	0	0	0	4.5	2	5	3	4	3	3	4	37.5
	●●△	3	3	1	4	2	2	2	1	0.5	3	0	2	1	1	2	1	28.5
	○●△	1	0	0	0	2	3	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	10
	○●▲	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	●○△	4	9	11	2	2	0	2	0	9.5	4	20	14.5	15	9.5	11.5	14.5	128.5
	●●△	20.0	45.0	55.0	10.0	10.0	0.0	18.2	0.0	47.5	20.0	100	72.5	75.0	59.4	57.5	72.5	41.7
	○●△	11	11	9	18	16	11	7	6	9.5	16	0	4.5	3	6.5	7.5	5.5	141.5
	○●▲	55.0	55.0	45.0	90.0	80.0	55.0	63.6	30.0	47.5	80.0	0.0	22.5	15.0	40.6	37.5	27.5	45.9
	○●▲	5	0	0	0	2	9	2	12	1	0	0	1	2	0	0	0	34
	25.0	0.0	0.0	0.0	10.0	45.0	18.2	60.0	5.0	0.0	0.0	5.0	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.0
	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	1	0	4	
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.1	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.0	0.0	1.3	

表7 2拍名詞5類（助詞が後接する場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
鍋	●○△	0	1	1	0	0	0	1	0	0	2	5	3.5	3	2	1	1.5	21
	●●△	3	4	3	5	2.5	1	2	1	5	3	0	1	1	2	4	3.5	41
	○●△	2	0	1	0	2.5	4	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	13.5
	○●▲	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.5	1	0	0	0	1.5
猿	●○△	2	2	1	1	0	0	0	0	0	1.5	5	4	5	3	3	4	31.5
	●●△	3	3	4	4	4	3.5	2	2	5	3.5	0	1	0	1	2	1	39
	○●△	0	0	0	0	1	1.5	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	6.5
	○●▲	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
蛇	●○△	2	1	2	0	0.5	0	0	1	0.5	3	5	4	4	2	4	5	34
	●●△	0	4	2	5	4.5	4.5	3	3	4.5	2	0	1	1	2	1	0	37.5
	○●△	3	0	1	0	0	0.5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5.5
	○●▲	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
雨	●○△	0	0	3.5	0	0	0	1	0	2	0	5	1	3	0	2	2	19.5
	●●△	3	5	0.5	5	2.5	2	2	1.5	3	5	0	4	2	4	2.5	3	45
	○●△	2	0	1	0	2.5	3	0	3.5	0	0	0	0	0	0	0.5	0	12.5
	○●▲	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
蜘蛛	●○△	1	5	5	3	1	0	0	0	3	2	4	5	5	3.5	5	5	47.5
	●●△	2	0	0	2	3	2	1	0	1	3	0	0	0	0.5	0	0	14.5
	○●△	2	0	0	0	1	3	2	5	1	0	0	0	0	0	0	0	14
	○●▲	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
汗	●○△	1	3	3	0	0	0	0	0	0	1.5	4	1	4	1	4	1.5	24
	●●△	1	2	1	5	1.5	0	0	1	5	3.5	1	4	1	3	1	3.5	33.5
	○●△	3	0	1	0	3.5	5	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0	18.5
	○●▲	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	●○△	6	12	15.5	4	1.5	0	2	1	5.5	10	28	18.5	24	11.5	19	19	177.5
	●●△	20	40	51.7	13.3	5	0	11.1	3.3	18.3	33.3	93.3	61.7	80	47.9	63.3	63.3	384
	○●△	12	18	10.5	26	18	13	10	8.5	23.5	20	1	11	5	12.5	10.5	11	210.5
	○●▲	40	60	35	86.7	60	43.3	55.6	28.3	78.3	66.7	3.3	36.7	16.7	52.1	35	36.7	456
	○●▲	12	0	4	0	10.5	17	5	20.5	1	0	0	0	0	0	0.5	0	70.5
	40	0	13.3	0	35	56.7	27.8	68.3	3.3	0	0	0	0	0	1.7	0	15.3	
	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.5	1	0	0	0	3.5	
	0	0	0	0	0	0	5.6	0	0	0	0	3.3	1.7	3.3	0	0	0.8	

## The Present Condition of Local Accent in the Southern Izu Peninsula and Aspects of Change

るような発音は頭高に含めると、話者全体で10%程度、高年層なら15%程度、頭高ではなく、下がり目のない型で発音されている。1～3類の語に助詞が後接しない場合、ほぼ全ての話者のほとんどの発音において発音になるのに比べると、揺れが大きいということになる。

4類・5類（表6・7）に助詞が後接する場合は、前述の1拍目から高く2拍目で下がる発音が最も多い。この発音は、いわゆる房総アクセント等において関与する2拍目の母音の広狭などによる違いはなく、どの語においても同様に見られる。これを頭高に含めると、若年層は、ほとんど頭高で発音している。それに対し高年層では、尾高で発音される場合がある。この現れに関する男女差であるが、5類のみの検定では5%水準で女性に尾高が多く現れる。助詞が後接しない場合は、4類・5類の類ごとの検定では5%水準では有意な差がない。ただし、二つの類をあわせての検定では5%水準で女性に下がり目のない発音が多く現れる。この結果をみると、傾向として男女差がある程度ありそうに思われる。ただし、助詞が後接した形で尾高が最も多く現れるのは男性話者のM41であり、やはり他の属性による違いをも考える必要があるだろう。

### 5.3 拍名詞

3拍名詞について、全ての調査語の結果を示すことは、紙幅の関係上できないので、東京語でのアクセントとの対応を基準に、代表的な語の結果のみを示しその傾向を見たい。なお、3拍名詞の調査語は表8の通りである。表8では、東京語のアクセントの型ごとに示した。

まず、東京語のアクセントを基準に見ていくと、東京語で平板となる語は、池代においても平板で現れることが多い。全体で平板で現れる割合が最も高い「鼠」と、比較的少ない「煙」、そして世代差の現れる「雀」を表9・10に示す。まず「鼠」と「煙」は、表を見ても分かるように、若年層においては、ほぼ全て平板である。それに対し高年層では、平板で発音される割合が8割から9割と高いが、尾高・中高で発音されることもある。そして、「鼠」と「煙」を比較しても分かるように、尾高と中高の出現率は、語により異なる。ただし、いずれもその現れは少ないので、性差も含め決定的なことを言うことはできない。一方、「雀」は、上記のように世代差が見られる。すなわち高年層では中高で

## 言語科学研究第12号（2006年）

表8 3拍名詞調査語彙

東京語で平板	煙、桜、鼻血、雀、鼠
東京語で頭高	烏、胡瓜、山葵、兜、蚕、二十歳、朝日
東京語で中高	団扇、匂い、五つ、従兄弟、卵
東京語で尾高	小豆、鏡、男、頭、硯、俵、鋏、毛抜き（東京語で平板もあり）

発音されることが多いのに対し、若年層ではほぼ平板で発音される。これは、池代ではもと中高であったものが、共通語の影響により変化したものと考えられる。

次に、東京語で尾高の語であるが、このグループは語によりその様相が異なる。表11・12では「男」「硯」「俵」の結果を示す。まず、「男」は、平板の発音もわずかに現れるが、高年層で88.2%、若年層で100%、全体で94.2%が尾高で発音している。これは、高年層・若年層・全体いずれにおいても、3拍の調査語の中で同じ型で発音される割合が最も高い、すなわち揺れが最も小さい語である（若年層では100%同じ発音となる語がこの他にもあるが）。ここに示さない「鏡」「鋏」「頭」も同様に、比較的安定して尾高で発音される。それに対し「硯」は、全体的に見ると尾高が多いが、平板も比較的多く現れる。この平板の発音は、世代に関係なく、また個人による差もあるが、個人内での揺れもある。これに似た傾向を示すのが「小豆」である。一方「俵」は高年層では尾高の方が出現率は高いが、平板も4割近く現れるのに対し、若年層では個人差はあるが平板で発音される割合が高く、かつ個人の中での揺れも少ない。馬瀬良雄・佐藤亮一編（1985）によれば、東京においても平板が、特に年代が下がるにつれ多く現れる。このような東京における変化の影響を受けていると考えることもできよう。助詞の後接しない場合は、各語ともわずかながらも中高が現れるが、ほとんどの場合下がり目のない発音がなされる。

東京語で中高の語は、揺れが大きい。その揺れは、中高と尾高の間での揺れであることが多いが、平板が現れる語もある。表13・14には「従兄弟」「五つ」「匂い」の結果を示す。まず、「従兄弟」は高年層では、(F33も含め)全体で中高14回に対し、尾高23回と尾高の方が多い。ただし、個人差があるようで、

The Present Condition of Local Accent in the Southern Izu Peninsula and Aspects of Change

表9 3拍名詞（東京語で平板の語に助詞が後接しない場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
鼠	○●●	2	4	2.5	4	4	3	1	4	4	4	4	4	4	3	4	4	55.5
	○●○	2	0	1.5	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4.5
煙	○●●	2	3	2	3	1.5	2	1	2	3	3	3	3	3	2	3	3	39.5
	○●○	1	0	1	0	0.5	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4.5
雀	○●●	0	2	4	0	0	0	1	2.5	4	3	4	4	3	3	4	3	37.5
	○●○	4	1	0	3	4	4	0	1.5	0	1	0	0	1	0	0	0	19.5
	●○○	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3

表10 3拍名詞（東京語で平板の語に助詞が後接する場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
鼠	○●●▲	4	5	4	2	4.5	5	3	4	5	5	5	4	5	4	5	5	69.5
	○●○△	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	○●●△	0	0	0	3	0.5	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	5.5
煙	○●●▲	1.5	5	4	4	2	3	2	2	5	5	5	5	5	4	5	5	62.5
	○●○△	2.5	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	6.5
	○●●△	1	0	0	1	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6
雀	○●●▲	0	0	3	0	0	0	1	1	5	2	5	5	5	4	4	4	39
	○●○△	5	5	2	5	4	5	2	4	0	3	0	0	0	0	0	1	36
	○●●△	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1

表11 3拍名詞（東京語で尾高の語に助詞が後接しない場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
男	○●●	2	4	2.5	4	3.5	4	1	4	4	4	4	4	4	3	4	4	56
	○●○	2	0	1.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3.5
	●○○	0	0	0	0	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.5
靦	○●●	1.5	4	2	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	2	3	4	53.5
	○●○	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	6
	●○○	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.5
俵	○●●	2	4	4	4	4	4	1	4	4	3	4	3	4	3	4	4	56
	○●○	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	4

表12 3拍名詞（東京語で尾高の語に助詞が後接する場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
男	○●●△	5	5	3.5	5	5	4	1	5	5	5	5	5	5	4	5	5	72.5
	○●●▲	0	0	1.5	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4.5
靦	○●●△	3	5	1	5	1	3	0	4	1	5	2	2	5	4	1	2	44
	○●●▲	1	0	3	0	1	1	3	1	4	0	3	3	0	0	4	3	27
	○●○△	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
俵	○●●△	1.5	5	3	4	1.5	3	1	4	0	5	0	1	0	0	0	1	30
	○●●▲	3.5	0	2	1	3.5	2	2	1	5	0	5	4	5	4	5	4	47

## 言語科学研究第12号（2006年）

個人の中での揺れはさほど大きくない。また、性差で言えば女性の方が尾高の出現回数が多い（ただし M41は5回とも尾高であるが）。一方、若年層では個人内で揺れのある場合もあるが、中高で発音されることが多い。「五つ」の場合はさらに高年層で尾高で発音されることが多く、男性でも尾高で発音することが多い。若年層は「従兄弟」と同様、個人差と若干の個人内の揺れがあるが、中高で発音されることが多い。これに対し「匂い」は高年層（厳密に言えば M72a も含め）は、多くの話者が個人内で尾高と平板で揺れている。これに対し M72a を除く若年層では、中高と尾高の間で揺れている。すなわち、「匂い」はもと尾高であったものが、中高へ変化しつつあると考えられる。ちなみに、助詞が後接する場合、高年層において中高がもっとも安定して発音されたのは、東京語で平板になる上記「雀」であった。

中高の語に助詞が後接しない場合、2拍目の次ではなく、3拍目の中で下降があるように聞かれる発音が現れる。これは2拍名詞の頭高になる語が、助詞が後接しない形で発音されるときに、1拍目から高く2拍目の中で下降がある発音になる場合があるのと並行的に考えることができよう。また、助詞の後接しない場合と、助詞の後接する場合を比べると、前者に中高の割合が高い。すなわち、助詞が後接し単位が長くなると、下がり目が後ろにずれるわけである。これについては、前記中條（1996）にも指摘がある。そして、今回の結果を見ると、この傾向は高年層だけではなく、現在の中学生にまで残っていることが確認できる。例えば、表13・14の「五つ」を見ると助詞が後接しない場合、若年層の91.7%が中高で発音している。ところが助詞が後接する場合には中高は60.9%になり、尾高が39.9%になる。「従兄弟」も、これほどの差はないが、助詞が後接しない場合にはほぼ全てが中高で発音されるのに対し、助詞が後接する場合には中高が83.3%に減り、残り16.7%が尾高で発音されている。

次に、東京語で頭高の語は、2拍名詞で述べたのと同じ問題、すなわち1拍目から高く、2拍目の次に下がると聞かれる発音が多く現れるという点がある。この点についての扱いは2拍名詞の場合と同様である。ここでは、「兜」「山葵」「二十歳」の結果を示す（表15・16。ちなみに「兜」と「二十歳」の調査文には一文ずつ、東京語で高で終わる修飾語が前接する文があるが、これも今回の表では区別しない）。

The Present Condition of Local Accent in the Southern Izu Peninsula and Aspects of Change

表13 3拍名詞（東京語で中高の語に助詞が後接しない場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
従兄弟	○○○	4	4	4	3	2	4	1	3	4	4	4	4	3.5	3	4	4	55.5
	○●●	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3.0
	●○○	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.5	0	0	0	0.5
五つ	○○○	2	3	3	2.5	2	3	1	3	3	2	3	3	3	3	2	3	41.5
	○●●	1	0	0	0.5	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	4.5
匂い	○○○	3.5	0.5	0	0	0	1	0	1	2	3	3	3	4	3	4	1	29.0
	○●●	0.5	3.5	4	3	3	2	1	3	2	1	1	1	0	0	0	3	28.0

表14 3拍名詞（東京語で中高の語に助詞が後接しない場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
従兄弟	○○○△	1	5	4	3	0	1	0	0	2	4	5	5	5	3.5	5	3	46.5
	○●●△	4	0	1	1	5	4	3	5	3	1	0	0	0	0.5	0	2	29.5
五つ	○○○△	0	2	3	2	0	0	0	0	4	0	4	4	3	1.5	0	3	26.5
	○●●△	4	2	1	2	4	4	1	4	0	4	0	0	1	2.5	4	1	34.5
	●○○△	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
匂い	○○○△	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	4	5	2	2	0	19
	○●●△	3	5	3	4	2	2	1	5	4	4	0	1	0	2	3	5	44
	●○○△	2	0	2	0	2	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	10

表15 3拍名詞（東京語で頭高の語に助詞が後接しない場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
兜	●○○	1	1.5	0.5	1	0	0.5	1	0	1	0	3	1	2.5	1	3	4	21
	●●○	2	2.5	3.5	3	3	3	0	1	3	4	1	3	1.5	2	1	0	33.5
	○●○	1	0	0	0	1	0.5	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	5.5
山葵	●○○	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	1	2	0	0	2	10
	●●○	0	0	0	0	0	0.5	0	0	2	2	0	1	1	1	2	1	10.5
	○●○	4	4	4	4	2	2.5	1	3	1	2	0	2	1	2	2	1	35.5
	○●●	0	0	0	0	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
二十歳	●○○	1	0	1	0	1	0	0	0	1	1.5	3	2	2	0	1	0	13.5
	●●○	0	1	2	1.5	0	0	0	0	1	0.5	0	0	0	2	2	1	11
	○●○	0	0	0	0	1.5	2	0	1	1	1	0	1	1	0	0	2	10.5
	○●●	2	2	0	0.5	0.5	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	8

表16 3拍名詞（東京語で頭高の語に助詞が後接する場合）

		F24	M24	F27	M28	F28	F31	F33	M41	M72a	M72b	M74	M90	F90a	F90b	F92	M93	
兜	●○○△	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	4	0	3	1	1	2	13
	●●○△	4	5	4	5	2.5	5	2	2	5	5	1	5	2	3	4	3	57.5
	○●○△	1	0	0	0	2.5	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	6.5
山葵	●○○△	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	2	0	1.5	1	10.5
	●●○△	0	0	1	0	0	0	0	0	4	4	0	4	2	4	1.5	4	24.5
	○●○△	1	5	3	2	0	0	1	1	1	1	0	0	1	0	2	0	18
	○●●△	4	0	1	3	4	5	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	22
	●○○△	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
二十歳	●○○△	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	0	0	3	0	9.5
	●●○△	0	0	2.5	1	1	2	0	1	5	3	0	4	5	4	2	3	33.5
	○●○△	3.5	0	0.5	0.5	4	2	1	0.5	0	2	0	0	0	0	0	2	16
	○●●△	0	1	0	1	0	0	2	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	4.5
	●○○△	1	4	2	2.5	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	12.5

## 言語科学研究第12号（2006年）

まず、「兜」は揺れが小さく、世代差もあまりない。高年層では中高も現れるが、頭高の出現頻度は全世代で高い。調査語の中では、「烏」がこれに類似した結果となった。さてこの語の場合、助詞が後接する場合もしない場合も、ともに中高で発音されることがある。しかし、話者に偏りがあり、さほど頻繁に現れるわけではない。さらに、助詞が後接した場合に中高が多くなるということもあまりない。すなわち、上で見た中高の場合と異なり、頭高の場合は助詞が後接しても下がり目の位置をずらすということがあまりないということになる。「山葵」においては、まず世代差が見られる。すなわち、高年層では、中高と尾高で揺れが見られ、頭高はほとんど出現しない。これは、中條（1996）において、中高型に発音される語は東京語より多く、「東京語アクセントの頭高型に対応する例が目立ち、その多くは東京語より古い相を示している」という記述に合致する現象である。それに対し若年層では尾高は現れず、中高も少なく、ほとんどが頭高となる。若年層では、高年層に見られた特徴が消えつつあり、東京語と同じ姿に変化している訳である。なお、東京語で中高となる語は上述のように揺れはあるが、頭高との間で揺れは見られなかったもので、これもやはり共通語の影響と考えられる。これに類似した結果となった語には、「蚕」「胡瓜」「朝日」がある。また、助詞が後接しない場合と比べて、後接する場合に後ろにずれる傾向があるという点も、他の中高の語と同様である。最後に「二十歳」は若年層では、ほぼ「頭高」で発音されるが、高年層では揺れが大きく、平板も3割強の割合で出現している。この語の語的な問題であると考えられる。

さて、ここまでは東京語のアクセントの型との対応によって見てきたが、上述のように池代において多く現れる型が、東京語の型と必ずしも一致するわけではない。では、それぞれの語はどの型で、どの程度安定して用いられているのであろうか。各語において、助詞の後接した場合のもっとも多く現れた型の出現率を年層別に示したのが表17である。

The Present Condition of Local Accent in the Southern Izu Peninsula and Aspects of Change

表17 出現頻度の高い型

順位	高年層			若年層		
	語	池代	出現率	語	池代	出現率
1	男 (3)	3	88.2	煙 (0)	0	100
2	雀 (0)	<u>2</u>	86.5	桜 (0)	0	100
3	鼠 (0)	0	82.9	鼻血 (0)	0	100
4	兜 (1)	1	82.9	胡瓜 (1)	1	100
5	小豆 (3)	3	81.6	兜 (1)	1	100
6	頭 (3)	3	81.6	鋏 (3)	3	100
7	毛抜き (3・0)	3	81.5	頭 (3)	3	100
8	鏡 (3)	3	73.7	男 (3)	3	100
9	匂い (2)	<u>3</u>	73.5	鏡 (3)	3	98.7
10	鋏 (3)	3	72.4	鼠 (0)	0	97.4
11	卵 (2)	<u>3</u>	71.7	烏 (1)	1	92.3
12	鼻血 (0)	0	71.1	二十歳 (1)	1	89.8
13	五つ (2)	<u>3</u>	71	山葵 (1)	1	87.2
14	桜 (0)	0	67.1	雀 (0)	0	87.2
15	烏 (1)	1	65.8	従兄弟 (2)	2	83.3
16	煙 (0)	0	65.3	俵 (3)	<u>0</u>	82.1
17	団扇 (2)	<u>3</u>	64.5	蚕 (1)	1	79.4
18	蚕 (1)	2	63.2	卵 (2)	2	78.7
19	硯 (3)	3	62.9	朝日 (1)	1	77
20	従兄弟 (2)	<u>3</u>	62.2	毛抜き (3)	3	73.4
21	俵 (3)	3	60.5	小豆 (3)	3	61.5
22	山葵 (1)	<u>3</u>	57.9	五つ (2)	2	60.9
23	朝日 (1)	<u>3</u>	56.6	硯 (3)	3	56.4
24	胡瓜 (1)	<u>2</u>	44.6	団扇 (2)	<u>0</u>	50
25	二十歳 (1)	0	33.8	匂い (2)	2・ <u>3</u>	48.7

語欄 ( ) 内は東京語における型、池代欄下線は東京語と異なるもの



## 言語科学研究第12号（2006年）

表に見るように、同じ型で発音される割合が80%以上となる語が、若年層では25語のうち17語あるのに対し、高年層では7語しかない。これは、年代が下がるにつれ、揺れが小さくなってきたことを示している。また、東京語と異なる型が多く現れるのが、若年層においては先に述べた「俵」と、「団扇」・「匂い」だけであるのに対し、高年層では9語にのぼる。そしてこの9語は「雀」を除き、東京語で中高ないし頭高の語であり、「山葵」「朝日」以外は東京語より下がり目が1拍後退したものである。「山葵」「朝日」は、東京語の頭高が中高に対応する例と考えられるが、それがさらに尾高との間で揺れが生じ、尾高の方が高い出現率となったものである。それぞれの中高の出現率は「山葵」34.2%、「朝日」43.4%と高い。さらに、同じく東京語では頭高の「胡瓜」は、中高がもっとも多く現れているが、尾高も40.5%と拮抗している。このように、高年層においては、東京語で中高の語および池代において中高で発音されることが多い語において、中高と尾高の間の揺れがもっとも頻繁に見られる。これに対し、平板および東京語でも尾高の語はこれらに比べると、語による違いも大きいですが、比較的同じ発音が聞かれることが多い。また、頭高は該当する語自体が少ないが、その少数の語は比較的安定している。若年層では、平板と頭高、および東京語で尾高の語は揺れが少ない。しかし、若年層においても、高年層と同様中高と尾高の間の揺れが見られ、高年層に見られた特徴は若年層にも傾向としてみることができ、また、「俵」や「団扇」のように東京語でも揺れが見られる語については、東京の若年層に見られるようになった型を発音するような傾向も見られる。

## 6. まとめ

まず、以上の結果を、中條（1996）の記述と比較したい。

2拍名詞についての基本的な点、すなわち1類は平板、2・3類は尾高、4・5類は頭高で発音されることが多いという点は、今回の調査においても確認できた。しかし、1類に男女差が認められ、女性は尾高型になる、とは言い切れない結果となった。逆に比較的安定しているとされている2～5類でも、1類と同程度の揺れが認められ、むしろこれらの類で男女差がある可能性が認められた。なお、若年層においては、若干の揺れ、及び発音上の特徴はあるものの、

## The Present Condition of Local Accent in the Southern Izu Peninsula and Aspects of Change

ほぼ東京語と同じような発音に変化している。

3拍名詞について、中條（1996）では、平板型、尾高型、頭高型、中高型の4種を認めつつも、平板型と尾高型は揺れや変化が観察されるとし、この揺れは女性に多く見られるとしている。また、東京語の頭高型の語が中高型に対応する例が多く、中高の語に付属語が伴うと、「山を後ろに押し出す傾向が見られ」、尾高型との「揺れ・変化」が見られるとする。

今回の結果は、2拍名詞と同様、基本的には同様の結果となった。すなわち、主として現れる型として平板、尾高、中高、頭高の4種が認められる。また、東京語で頭高になる語が中高で現れる場合が多いというのも、高年層においては同様に現れている。異なるのは、中條（1996）で揺れが観察されるとされた平板・尾高の発音は、比較的安定しているという点である。揺れがもっとも多く見られたのは中高であった。また、若年層においては高年層であまり現れることのない頭高が増加している。また揺れも小さくなっている。しかし中高・尾高の語の中には揺れが見られる語も残っている。中條（1996）とのこのような差が何によるのか、今回の調査と調査の時期（したがって年齢差）、調査語（調査語が今回は非常に限られていることも含め）の違い等があるので、今後検討すべき点として残る。

さて、揺れが見られる場合は、基本的に下がり目が一つ後退した型との間での揺れが多い。すなわち、2拍名詞で言えば中高の多い2・3類は平板との、頭高で発音されることの多い4・5類は中高との間での揺れである。このような揺れは、型が変化する際の過程と捉えられることが多い。当地域においても、このような変化が生じつつあった可能性がある。しかし、実際の現在の若年層においては、共通語化により揺れが少なくなり、下がり目が後退する以前の形で安定するようになっている。3拍名詞でも、単位が長くなる分、揺れで現れる型の種類が増えるが、基本的には2拍名詞と同様後ろに一つ後退した型との揺れが多い。すなわち、頭高なら中高と、中高なら尾高と、尾高なら平板との間で揺れる場合が多い。

ここで問題となるのは、平板の場合である。平板との間で揺れが見られるのは、2拍名詞では尾高、3拍名詞では中高あるいは尾高である。下がり目が1拍後退するなら、平板からの変化としては、頭高になると考えられる。しかし、

## 言語科学研究第12号（2006年）

当地域においてはさらにそれより1拍（以上）移動しているわけである。平板から頭高へという変化を自然のものとするなら、この揺れの状態は、他より一歩進んだ状態になっていることになる。平板との間で揺れが見られる語の場合、助詞が後接しない場合にも頭高はほとんど現れず、また4・5類の語に見られた1拍目から高く2拍目の次で下がるというような発音もほとんど聞くことがない。もし、頭高を経ての変化であれば、このような発音が現れても良さそうであるが、これら頭高の特徴は現れない。これは3拍名詞も同じである。木川（2005）では、頭高を避けるため、下がり目が1拍以上ずれていったと考えたが、この間の事情についてはさらに考えたい。

上で若年層においても若干揺れている語があることを見たが、高年層の特徴が若年層にも見られる点としては、この他に、中高を中心として、助詞の後接しない場合とする場合で、下がり目の位置が移動する、すなわち後者では前者より下がり目が後退すると言う点がある。もちろん、高年層に比べると、若年層は移動する現象の現れは少ない。しかし、それでもなお、若年層においても移動する場合がある、というのが共通語化が進んでもなお残るこの地域の特徴であると言えよう。

最初にも述べたように、環境による現れ方の違いについては稿を改めたい。さらに、木川（2005）との比較、すなわち自然談話における現れ方との異同についても別に考察する予定である。

なお、本研究は平成15～17年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））「静岡県下『言語の島』における言語変容に関する基礎的研究」によるものである。

## [参考文献]

- 亀田裕見 1994 「自由変異体の多い方言音調の構造的記述—静岡県南伊豆町方言における3拍名詞について—」『国語学』179
- 木川行央 2005 「談話資料から見た伊豆松崎町方言のアクセント」『神田外語大学言語科学研究センター紀要』第4号
- 金田一春彦 1943 「静岡・山梨・長野県下のアクセント」『日本音声学協会会報』72・73、74・75
- 金田一春彦監修 秋永一枝編 2002 『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
- 中條 修 1976 「南伊豆町の音韻体系」『地方史静岡』6
- 1983 「静岡県の方言」『講座方言学6 中部地方の方言』国書刊行会

The Present Condition of Local Accent in the Southern Izu Peninsula and Aspects of Change

- 1996 「伊豆南部特殊アクセント」『平山輝男博士米寿記念論集 日本語研究諸領域の視点』明治書院  
前川秀雄 1970 「静岡県のアクセント」『方言研究の問題点』明治書院  
馬瀬良雄・佐藤亮一編 1985 『東京語アクセント資料』文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集